

「昔を語る多胡の古碑」ってなんだ？



富岡市立富岡中学校

2 年	4 組
堀越	晃

1. 研究の動機

富岡市に住む私にとって、上毛かるたで一番身近なのは「日本で最初の富岡製糸」。次に身近な札の一つに吉井町の「昔を語る多胡の古碑」がある。「多胡碑」は、国の史跡文化財であり、「上野三碑」として2017年ユネスコ「世界の記憶」遺産に登録された。しかし、私は、あの石碑の何がすごいのか何も知らない。身近な古碑について、東国文化の自由研究をきっかけに調査し、理解を深めたいと思った。

2. 疑問と予想

- | | |
|-----|--|
| 疑問① | 「多胡碑」(上野三碑)の「昔を語る」とはどのくらい昔の何を語っているのだろうか。 |
| 予想 | 弥生時代頃 その地域に起こった大きな出来事を石に刻んでいるのではないか。 |
| 疑問② | 「上野三碑」の「多胡碑」以外の二つの碑はどこにあるのか。 |
| 予想 | 高崎市街地周辺の山の中にある。 |
| 疑問③ | 「多胡」とは何か。 |
| 予想 | 人の名前か土地の名前。 |
| 疑問④ | 「古碑」は日本のそこら中にあると考えられるが、他の碑と何が違ってすごいのか。 |
| 予想 | とにかく時代が古いところがすごい。 |
| 疑問⑤ | なぜ上野三碑が「世界の記憶」に認定されたのだろうか。 |
| 予想 | 全くわからない。「上野三碑」の存在価値がわかれば回答できると思う。 |

3. 調査方法

① 現地調査

三つの碑「山上碑」「多胡碑」「金井沢碑」の場所を確認して実際に訪れてみる。
解説看板や資料を読み、音声ガイドを聞く

② 文献調査 資料を使い調べる。「多胡碑記念館」、群馬県東国文化ポータルサイト、関連本等で調べる。

4. 調査

現地調査実施日：2025年7月29日(火)

◇無料巡回バス「上野三碑めぐりバス」の運行について

高崎市では無料の巡回バスを一日50分間隔で運行している。

 上野三碑のラッピングバス

始発 上信電鉄吉井駅(定員9名 1月1日のみ運休)

とても魅力的だが、今回は初めての調査で、時間も読めないため、猛暑の中(桐生市39.9℃)、時刻表に合わせての調査は困難と判断して自家用車での調査にした。

◇ルートを考える。

巡回バスを参考にルートを決める。

「多胡碑」は「多胡記念館」が併設されており、資料も多く、最後に三碑を比較することもできると思い、ゴールにした。

巡回バスルートに「山名古墳群」というものもあるのでルートに加える。

最寄りの駅(場所の目安)

「金井沢碑」上信電鉄 根小屋駅 「山上碑」 上信電鉄 西山名駅

◇決定ルート ①金井沢碑 → ②山名古墳群 → ③山上碑 → ④多胡碑(記念館)

 移動所要時間(約) 10分 5分 5分



(1) 金井沢碑

① 現地調査

- | | |
|------------|--|
| ・行きやすさ ★★★ | 道路にも案内があり、周辺になると、紫色の「上野三碑」ののぼり旗がたっているのわかりやすい。 |
| ・駐車場 ★★★ | トイレ併設、きれいで使いやすい。 |
| ・古碑までの道★★★ | なだらかな階段で上りやすい。きれいに整備されている。 |
| ・環境 | 山の中であるのに、きちんと整備されていて周辺はとてもきれい。
古碑は「多胡碑」と同じで、風雨にあたらないよう4方向から見られるガラス窓付きの建物(覆屋)の中にある。
ライトと音声ガイドのスイッチ(手動)がついている。
解説看板と資料の入った引き出しの設置あり。無人。 |



石について

大きさ 高さ 110cm 幅 70cm 厚さ 65cm
色 種類 色 赤みがかった灰色 碑身・台石ともに 輝石安山岩 損傷あり
文字の数 112文字 かたち ずんぐりとして丸っこい



② 文献調査

刻まれた文字（銘文）

読み下し文

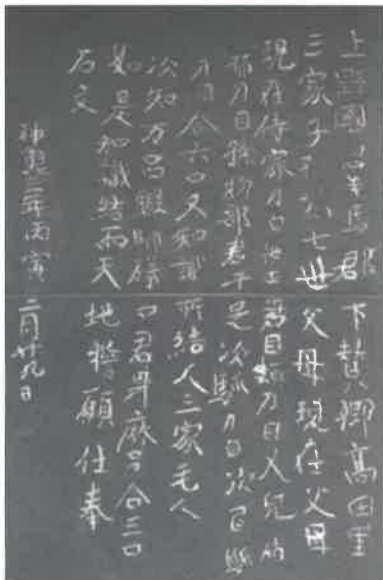
訳

女性

男性

地名

上野国群馬郡下賛郷高田里
三家子□が、七世父母現在父母
現在侍家刀自（他田）君目（類）刀自又児（加）
那刀自孫物部君牛足次驛刀自次（若）驛
刀自合六口又知識所結人三家毛人
次知万呂鍛師儀マ君身麻呂合三口
如是知識結而天地誓願仕奉
石文
神龜三年丙寅二月廿九日



上野国「こうずけのくに」羣馬郡「くるまのこおり」下賛郷「しもさぬのさと」高田里「たかだのこざと」の
三家子□が、七世「しちせい」父母と現在父母の為に、
現在侍「はべ」る家刀自「いえとじ」の他田君目類刀自「おさだのきみめづらとじ」、又児「こ」の加
那刀自「かなとじ」、孫の物部君牛足「もののべのきみうまたり」次に※刀自「ひづめとじ」次に若※
刀自「わかひづめとじ」の合せて六口、又知識を結びし所の人、三家毛人「みやけのえみし」、
次に知万呂、鍛師「かぬち」の儀部君身麻呂「いそべのきみまろ」の合せて三口、
是の如く知識を結び而「しこう」して天地に誓願し仕え奉「たてまつ」る石文「いしぶみ」
神龜「じんぎ」三年丙寅「ひのえとら（へいいん）」二月二十九日
※は「ひづめ」（馬偏に爪）

上野国群馬郡下賛郷高田里に住む
三家子□が（発願して）、祖先および父母の為に、
ただいま家刀自（主婦）の立場にある他田君目類刀自、その子の
加那刀自、孫の物部君牛足、次の※刀自、その妹の若※刀自の
合せて六人、また既に仏の教えで結ばれた人たちである三家毛人、
次の知万呂、鍛師の儀部君身麻呂の合せて三人が、
このように仏の教えによって（我が家と一族の繁栄を願って）お祈り申し上げる石文である。
神龜三（七二六）年丙寅二月二十九日
*用語 家刀自一家を統括する女性の位。主婦。知識一仏教の教え。
鍛師一製鉄や金属加工に携わる職。



カナビー

「訳」をさらにわかりやすく解釈する

上野国群馬郡下賛郷高田里に住んでいる三家子□が、祖先と父母のために、
現在、主婦の他田君目類さんと、その子どもの加那さんと、孫の三兄妹物部君
牛足さん、彼の妹のひづめさん、次の妹の若ひづめさんの合せて6人と、
それから、仏教の教えで結ばれている、三家毛人と弟の知万呂、鍛冶師の儀部君
身麻呂の3人が、
このように仏の教えによってお祈りする（供養と繁栄を祈る）石碑です。

726（神龜三）年 干支は丙寅とし 2月29日



わかったこと

- ・「金井沢碑」の昔とは 726 年 奈良時代
- ・上野国群馬郡下賛郷高田里に住んでいる三家氏の一族によって建てられた。
- ・古代の上毛野国から、奈良時代には上野国になっている。
- ・日本語の語順に沿って漢字を並べ書かれている。
- ・国、群、郷、里と刻まれ、「国郡郷里制度」法による政治制度だったことがわかる。

政府の政策が地方でも確実に実施されたことを証明している。

・「羣馬（群馬）」の地名の使用は県内最古の事例。「くるま」と読む。群馬県の名前のルーツを知る上で非常に重要な資料。

- ・三家、他田、物部、磯部の 4 つの氏、9 人の名前が登場し、結婚関係がわかる。
- ・三家とは「山上碑」を建てた佐野三家の末裔たちのさらに子孫であり、同じ一族がこの碑をたてた。
- ・刀自は女性の敬称。家刀自は主婦。女性の名前がたくさん書かれており、家族のつながりに女性が大きな役割を果たしていた。
- ・加那刀自は物部氏に嫁いで姓がかわっているが、結婚後も実家の祭祀に子どもと参加している。反対に夫の名前は記されていない。（参加していない）。現在とは違う「戸籍制度」。
- ・女性を中心とした家族関係やその社会的地位のあり方など女性史の観点でも重要な資料である。
- ・高崎市域から甘楽郡にかけては「物部」の氏名を刻んだ遺物が多く出土することから、大きな勢力で古代の地域経営に深く関与していると考えられている。
- ・仏教の普及を刻んでいる。豪族は結婚や仏教の信仰によって一族や仲間の結束を強めていた。
- ・「知識」とは仏教信仰にかかわる人や行為のこと。奈良時代、仏教が群馬にも伝わっている。
- ・「鍛師」は製鉄、金属加工に携わる人。そのリーダー。製鉄や金属器の生産を伺える。
- ・石碑を造る高度な技術が上野国に伝わっている。
- ・石碑を建てる文化は朝鮮半島を経由し、飛鳥時代にもたらされたものであり、当時先進的な文化である。
- ・仏教、文字、石碑建立など、仏の教えや石・金属の加工技術、それぞれこれらに深い知識をもつ渡来人が上野国に多くいたと考えられる。
- ・「金井沢碑」は、江戸時代中期頃、山崩れで発見された。「洗濯石」に使われていたとの民話もある。しかし、ほとんど損傷なく、文字も残っていて、改めて「石」の記録の価値がわかる。

【まとめ】「金井沢碑」は、何を語っているのか。

奈良時代、一族が仏教の教えで結束して、先祖と両親の供養をしたことが書かれている。豪族は結婚や仏教の信仰によって一族や仲間の結束を強めていた。

奈良時代初期の「国郡郷里制度」法による政治制度の記述で、政府の政策が地方でも確実に実施されたことを証明している。文字の使い方、戸籍や女性の社会的地位のありかた、群馬県の名前のルーツである「羣馬（群馬）」の文字がはじめて使われている。地方にも仏教が浸透し、寺院建立もあったことなど歴史にかかわる重要な事実が語られている。

→古代東国での行政制度、家族関係、仏教の広がり実態などを知ることができる。

(2) 山上碑

① 現地調査

- | | |
|--------------|--|
| ・行きやすさ ★★☆☆ | 道路にも案内があり、周辺になると、紫色の「上野三碑」ののぼり旗がたっているのだからわかりやすい。 |
| ・駐車場 ★★☆☆ | トイレ併設、きれいで使いやすい。 |
| ・古碑までの道 ★★☆☆ | きれいに整備されているが急な階段が続くので大変。杖が設置してあり便利。 |
| ・印象 | 名前の通り、山の上にある。整備されていて周辺はとてもきれい。古碑は「多胡碑」と同じで、風雨にあたらないう3方向から（後方は通れない）見られるガラス窓付きの建物（覆屋）の中にある。ライトと音声ガイドのスイッチ（手動）がついている。解説看板と資料の入った引き出しの設置あり。無人。山上古墳が隣接。 |



○石について

大きさ	高さ 111 cm	幅 47 cm	厚さ 52 cm
色 石の種類	色 青みがかった灰色	碑身・台石ともに 輝石安山岩	
文字の数	53 文字	※台石は明治時代に増設	



② 文献調査

刻まれた文字（銘文）

目付
男性
女性
地名

辛巳歲集月三日記
佐野三家定賜健守命孫黒壳刀自此
新川臣児斯多々弥足尼孫大児臣娶生児
長利僧母為記定文也 放光寺僧

辛巳歲集月三日記
佐野三家定賜健守命孫黒壳刀自此
新川臣児斯多々弥足尼孫大児臣娶生児
長利僧母為記定文也 放光寺僧

読み下し文

辛巳歲集月「かのとみ（しんし）」としじゅうがつ「三日」に記す。
佐野三家「さののみやけ」を定め賜える健守命「たけもりのみこと」の孫の黒壳刀自「くろめとじ」此れ
新川臣「にいかわのおみ」の児の斯多々弥足尼「したたみのすくね」の孫の大児臣「おおごのおみ」に娶「とつ」ぎて生める児の
長利僧「ちようりのほうし」が、母の為に記し定むる文也。 放光寺「ほうこうじ」僧

訳

辛巳年（天武天皇十年＝西暦六八一年）十月三日に記す
佐野屯倉をお定めになった健守命の子孫の黒壳刀自。これが、
新川臣の子の斯多々弥足尼の子孫である大児臣に嫁いで生まれた子である
（わたくし）長利僧が母（黒壳刀自）の為に記し定めた文である。 放光寺の僧。
*用語
刀自（とじ）＝女性の尊称（臣（おみ）・足尼（すくね）＝男性の尊称



山上碑にみる人物関係



「放光寺」

前橋市総社町の「山王麿寺」と推定される。
この寺は、当時、東国で最古・最大級の寺院であった。
また仏教はその頃先進の思想体系だったので、ここの寺院の僧であった「長利」は相当な知識者であったと考えられている。



ヤマビー

「訳」をよりわかりやすく解釈する

西暦 681 年 10 月 3 日（天武天皇の時代）に記す。

佐野地区（高崎市）にあるヤマト王権直轄の土地をはじめに管理していた健守さまの子孫の黒壳さん。この方が、新川さまの子である斯多々弥さまの子孫である、大児さまと結婚して生まれた子である（わたくし）長利という名の僧がお母さん（黒壳さん）のために記し定めた文である。 放光寺の僧侶。

「山上古墳」について

「山上碑」の右側に隣接する直径 15m、高さ 5m の円墳。

地元の凝灰岩を切り組んで仕上げてある。切り石を組上げた精巧な截石切組積の横穴式（南向き奥行き 7.4m）。中は見学自由。



群馬県の同種の石室のなかでは最も古い7世紀前半から中頃のもので、有力豪族佐野三家の族長が埋葬されたと考えられている。石室内には中世の石造物が置かれている。(出土品は不詳)

山上碑が建てられた681年よりも数十年古いため、もともとは黒売^{くろり}の父の墓として造り、後に黒売も埋葬(追葬)されたと考えられている。これは、他家に嫁いだ女性が実家の墓に埋葬された事実で、古代の家族制度を知るうえでとても重要である。被葬者や葬送制度が推定できる古墳はきわめて希少であり、「山上碑」とともに国の特別史跡に指定されている。

わかったこと

- ・「山上碑」の昔とは 681年 飛鳥時代
- ・完全な形で残る日本最古の石碑
- ・日本語の語順に沿って漢字を並べ書かれている最古の石碑。これ以前は中国語の語順で文字が書かれている。
- ・母のために息子が建てた石碑である。
- ・石碑に彫られている黒売(僧の長利の母)が埋葬されたとみられる「山上古墳」が隣接している。埋葬時に「山上碑」も造られたと考えられている。古墳に埋葬された人物の名前が記してある貴重な碑である。
- ・長利の母である黒売刀自は、夫の墓ではなく、自分の実家の墓に埋葬された。「山上碑」は現在とは違う古代の家族制度がわかる。
- ・佐野三家は佐野(高崎市)の屯倉のこと。6世紀から7世紀前半にかけて各地の軍事・経済的用地に置かれたヤマト王権が直接支配する直轄地である。ヤマト王権との関わりがあったことがわかる。
- ・佐野三家は、現地の豪族と中央から派遣された技術者によって経営された。そのはじめの管理者が石碑では豪族「健守^{たけもり}」とされている。
- ・「山上碑」を建てた僧侶の「長利」が勤めた「放光寺」は前橋市総社町の「山王廃寺」と推定され、東国で最古・最大級の寺院。ここに勤めた「長利」は仏教を熱心に信仰し、先進の思想で石碑を建立した。
- ・上野国に仏教が伝わり、浸透し、お寺が建立された。豪族の権力の象徴が古墳から寺院へと移っていった。
- ・自然の石をあまり加工していない形状は、朝鮮半島の新羅の石碑に類似しており、碑の造立に際しては当地の新羅系渡来人が深く関与していると推定され、高い知識を持った渡来人が多く、上野国に存在し、上野国に「石碑文化」が伝わっていた。

まとめ「山上碑」は、何を語っているのか。

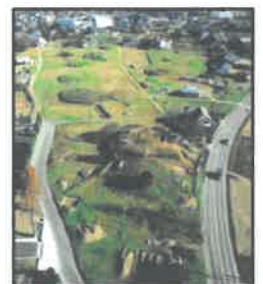
飛鳥時代、僧の「長利」が母黒売刀自の供養のため、古墳に埋葬する際、石碑を建てた。母はヤマト王権の直轄領を治める一族の出身であり、息子で僧の「長利」は、当時最大級の寺院「放光寺」に勤めていた。飛鳥時代、上野国まで仏教が伝わり、大規模な寺院が建立されていたこと。上野国に佐野三家というヤマト王権が直接支配する直轄地があり、そのはじめの管理者「健守^{たけもり}」を祖とする有力な一族が存在していた。石碑の建立者である「長利」は大陸伝来の最先端の方法で供養をした。それは唐や新羅で流行している「石碑」の建立であった。そこには当時中国から「石碑文化」を伝える知識を持った新羅系渡来人の存在が上野国にあった。ということがわかる。

→大和政権との深い関わり。仏教と漢字 朝鮮半島の文化に影響を受けている。

(3) 山名古墳群

① 現地調査

- | | |
|-------------|---|
| ・行きやすさ ★★☆☆ | 道路沿いだが、古墳の位置が把握しづらい。 |
| ・駐車場 ★ | あり。トイレなし |
| ・古墳までの道★ | なだらか。草が生い茂っている。周囲は膝丈以上の草で古墳の数メートル手前でストップ |
| ・印象 | 駐車場から眺めてもたくさんの古墳が東西に点々と確認できる。解説看板(ひび)あり。無人。 |



② 文献調査

山名古墳群は6世紀中頃～7世紀前半(古墳時代後期から終末期)につくられた有力者の古墳の集まり。平成13～18年度にかけて古墳群の発掘調査が実施された。

史跡地内に前方後円墳である山名伊勢塚古墳のほか、帆立貝形古墳1基、円墳14基、形態不明1基の合計17基の古墳が現存する。かつては67基所在していた。山名伊勢塚古墳は2段築成の前方後円墳で、墳丘全長が65メートルあることが確認された。出土遺物等から、6世紀後半に造られたと考えられている。また、石室は近隣の岩野谷丘陵(観音山丘陵)から産出する凝灰岩を使用した削石積横穴式石室であることもわかった。山名原口2-2号墳の横穴式石室は模様積みと呼ばれる石の積み方をしており、発掘調査の際には鉄鏃・馬具・玉類など多くの副葬品が出土した。この石室は、現在史跡地内に保

存されており見学することができる。岩野谷丘陵および眼下の平野を開拓し佐野三家の創始に関わり、のちに文化的に発展する南八幡地域の礎を築いた人々の墓とされる。駐車場側からはっきり確認できたのは、5号墳から11号墳まで。

(4) 多胡碑

① 現地調査

- ・行きやすさ ★★★ 多胡碑記念館を目指すと敷地内にある・駐車場 ★★★ 多数あり・
- ・トイレ 敷地内の多胡碑記念館にあり
- ・古碑までの道★★★ 平地。敷地内は大樹もあり木陰がある。
- ・印象 記念館の庭となっているので、とてもきれい。古碑は4方向からみられるガラス窓付きの建物（覆屋）の中にある。
ライトと音声ガイドのスイッチ（手動）がついている。



○石について

笠石・碑身・台石から構成される				
大きさ				
笠石	奥行 90 c m	幅 95 c m	中央厚さ	27 c m
碑身	高さ 129 c m	幅 69 c m	厚さ	62 c m
重量	1.34 t			
色	石の種類 薄茶色	碑身・台石ともに牛伏砂岩		
文字の数	6 行 80 文字			
※台石は第二次世界大戦後にコンクリートで固定				



② 文献調査

刻まれた文字（銘文）

読み下し文

訳

地名	位石上尊	太政官二品	宣左中弁正五位下	成多胡郡	良郡并三郡内	弁官符上野国
官職	石太	二品	五位下	郡	三郡内	上野国
男性の名	藤原尊	親王	多治比真人	和銅四年三月九日甲寅	郡成給羊	片岡郡
日付						緑野郡

弁官符「おお」す。上野国の片岡郡「こおり」、緑野「みどの」郡、甘良「から」郡并せて三郡「みつのこおり」の内、三百戸を郡となし、羊に給いて多胡郡「たごのこおり」と成せ。

和銅四年三月九日甲寅「きのえとら（こういん）」に宣「の」る。左中弁・正五位下多治比真人「たじひのみひと」。

太政官・二品穂積親王「にほんほづみのみこ」、左大臣・正二位石上尊「いそのかみのみこと」、右大臣・正二位藤原尊「ふじわらのみこと」。

朝廷の弁官局から命令があった。上野国片岡郡・緑野郡・甘良郡の三郡の中から三百戸を分けて新たに郡をつくり、羊に支配を任せる。郡の名は多胡郡としなさい。和銅四（711）年三月九日甲寅

左中弁正五位下多治比真人による官旨である。

太政官の二品穂積親王、左大臣正二位石上（麻呂）尊、右大臣正二位藤原（不比等）尊。



タゴビー

「訳」をよりわかりやすく解釈する

朝廷からの正式な命令がきた。

片岡郡、緑野郡、甘良郡の3つの地域から300戸を分けて新たな郡をつくりなさい。

そこは羊という人物に支配を任せる。新しい集落の名前は「多胡郡」としなさい。711年3月9日。

これは多治比真人（多治比三宅麻呂）さまから送られた天皇の命令である。

（当時の政府高官名）穂積親王さま 石上麻呂さま 藤原不比等さま

わかったこと

- ・「多胡碑」の昔とは 711年以降 奈良時代
 - ・中央政府からの命令で「多胡郡」を新たに建郡した記念に建てられた。
 - ・朝廷から命が届くほど、上野国はヤマト政権と深い関わりがある。
 - ・緑野郡、片岡郡、甘良郡の3つの地域から300戸を割いて新しく「多胡郡」をつくった。緑野地域には東国最大の前方後円墳の七興山古墳がある。
 - ・「多胡」とは朝廷が名づけた新しい集落の地名。
 - ・300戸は6000人規模の集落。この規模を治めるのは豪族レベル。
 - ・「多胡」の地は、屯倉の領域を含み、ヤマト政権の直轄地で、中央とのかかわりが深かった。
 - ・多胡の建郡については「続日本紀」の和同4年3月の項にも同じ記載がある。
 - ・建郡の目的には、当時中央政府は東北地方の蝦夷計略を進めており、その財源としての役割の可能性もある。
 - ・「多胡郡」の最初の長官は「羊」という人物。この地域では古墳時代からヤマト王権と深く関わりがあり、多くの渡来人が移住していた。「羊」も地元で力を蓄えた渡来系の有力者であったと考えられている。
 - ・「羊」はこの石碑の一番の謎である。人名であることが有力な説。羊に関する資料や歴史書は残っていないが、この地方には「羊太夫伝説」が伝えられている。伝説では、羊は渡来系の有力者と言われている。
 - ・動物の「羊」は当時、高貴な貢ぎ物であり、中央の身分の高い人しかみたことのないものであった。地方にはいない動物。高温多湿な日本では明治時代までなかなか根付かなかった。「羊」が動物の可能性は低い。
 - ・刻まれた文字は楷書体であり、当時最先端の中国文化の影響を受けている。
 - ・石字は中国六朝時代の書風に通じるものとして、書の世界でも高く評価されている。江戸時代に朝鮮通信使を通して拓本（石碑に紙をあて、墨を使い、石文を写し取る方法）が中国にわたり、中国の漢字教科書にもこの字が採用されている。また現代でも書道の手本として使われて日本の書家たちにも高く評価されている。非常に美しい文字である。
 - ・多胡の中核である正倉（現在は跡地）は豪壮な建物であり、群馬県内では多胡郡にしかみられない。全国的にも貴重なものである。それだけ国家にとって多胡郡が重要なものであったことを示している。
 - ・有名な藤原不比等の名前が刻まれている。藤原不比等は大宝律令や日本書紀の編纂に関わっている人物である。
 - ・石碑の最後に出てくる3つの名前は当時の中央政府首脳である政府高官の名前である。中央政府との関わりを記すことで、建郡の権威付けをはかっている。
 - ・朝廷は「胡」が海外の国の名前だというのは認識していて、あえて「多胡郡」という名前を付けている。
 - ・「胡」について。「続日本紀」に唐で起きた安祿山の乱（755年）の記録の中に、安祿山を「胡人」と記している。安祿山はソグド（中央アジアのソグディアナ地方を故郷とするイラン系民族）人の父と突厥（とっけつ）人（中央ユーラシア テュルク系遊牧民）の母を持つ。朝廷は「胡」という国を把握していた。
 - ・胡人が多く住んでいたことを示している可能性もある。
 - ・「多胡碑」の建立には、様々な分野に深い知識をもつ渡来人が関わっている。
 - ・多胡地域には古墳時代から多数の渡来人が移住。711年には「胡」「高句麗」「唐」「新羅」など様々な国の渡来人が集結し深い知識や技術を用いて、文化の発展を築いた。
 - ・東アジアの文化交流がある多胡地域は、大和朝廷にとって経済の重要な地域だった。奈良・平安時代には、上野国有数の手工業地域（瓦などの窯業、生糸などの布生産）に成長している。
 - ・石碑の笠石は江戸時代以降、笠石の向きは少なくとも3回は変えられている。
- 割れた面が正面にならないように設置されてきたが、本来は割れた面が正面となることからわかっており、多胡碑を守ってきた人々が多胡碑の美観を損なわないよう、割れた面が見えないように配慮してきたものと想像される。2023年には多胡碑の原型を後世に継承できるように精査し補修工事を行い、笠石の向きも本来の向きに変えた。
- ・碑身【ひしん】に笠石【かさいし】をのせる形状は当時最先端であった。

【豆知識】この地方の人々の間で伝えられた物語「羊太夫伝説」の中では、羊は渡来人の子孫で、お供の小脛も渡来人だった可能性がある。羊と小脛が仲たがいのことで、勢力を持っていた羊は朝廷から反逆者として滅ぼされてしまった。それほど中央とのつながりが深い人物として考えられる。

江戸戸藩主 松浦静山随筆『甲子夜話（かつしやわ）』には、多胡碑の近くの古墳（羊太夫の墓）から、キリ



上から見た笠石

スト教の十字架と「JNR」（ラテン語で「ユダヤ人の王、ナザレのイエス」を意味する略語）」というローマ字が書かれた銅板が見つかったと記述があり、この時代の景教の伝来説も捨てきれないらしい。

まとめ「多胡碑」は、何を語っているのか。

「多胡郡」は711年、中央政府からの命で新しく建郡された記念碑である。上野国の地域はヤマト政権と深い関わりがあり、「多胡」の地名も中央が名付けた。そこを支配したのは渡来人の子孫とみられる「羊」である。石碑の美しい文字、仏教の伝来、笠石をのせたかたちなどからも先進的な文化の知識や技術を持つ渡来人が多くこの地に共生していたことがわかる。→「多胡郡」はヤマト政権の直轄地であり、経済の要地。

5. 考察

疑問① 「多胡碑」「山上碑」「金井沢碑」の「昔を語る」とはどのくらい昔の何を語っているのだろう。

A. 「昔」とはいつか 三つの石碑はそれぞれ年代順にすると次のように建立された。

山 上 碑	(推定 681 年建立)	飛鳥時代
多 胡 碑	(711 年建立)	奈良時代
金 井 沢 碑	(726 年建立)	奈良時代

B. 何を語っているのか

「山上碑」は、漢字が日本語の語順で刻まれた日本最古の石碑。東国有数の寺院の僧であった幅広い知識をもっている長利が母の供養のために、埋葬した古墳の隣に建てた。石碑は、681年頃、豪族たちの力の象徴が古墳から寺院に移る時代であったこと。当時先進の思想であった仏教と漢字が地方にも伝わったこと。古代の日本にはない「石碑」から朝鮮半島の文化の影響を受けたことを語っている。

「多胡碑」は、「多胡郡」がヤマト政権の中央からの命令で新しく建郡された記念碑である。奈良時代初期に上野国が大和政権と深い関わりがあり、この地域は、中国だけではなく様々な国の渡来人が集結し深い知識や技術を用いて、文化の発展を築く、他民族共生社会であり、朝廷の経済的な要地であったことを語っている。

「金井沢碑」は、^{みやけし}三家氏を名乗る豪族が、先祖の供養と一族の繁栄を祈って建てた石碑である。家族のつながりに女性が大きな役割を果たしていたこと。当時の行政制度（国郡郷里〔こくぐんごうり〕制）の整備状況。古代東国でも仏教が浸透していること。「群馬」のルーツ「羣馬」の文字がすでに使われていることを語っている。

「上野三碑」は東アジアの文化の広がりや古代東国人の実像を今に伝える大変貴重な記憶遺産である。

「山上碑」「多胡碑」「金井沢碑」に刻まれた碑文は中国を起源とする政治制度・漢字文化、インドを起源とする仏教が海を渡り、日本列島東部の上野国にまで伝来した事実を語っている。上野国の人々がその文化を受け入れ、自分のものとしていったことを証明している。

疑問② 「上野三碑」の「多胡碑」以外の二つの碑はどこにあるのか。

それぞれの石碑の距離間は

山上碑-多胡碑間、多胡碑-金井沢碑間がそれぞれ約3km、金井沢碑-山上碑間がほぼ1.5kmと、

3つの碑がすべて高崎市内に近接して現存している。三碑は高崎市南部地域の直径およそ3kmの中に集中して建てられている。このことはきわめて珍しく3つともすべて国の特別史跡に指定されている。特別史跡とは国宝と同格のものである。（国宝は建造物、美術工芸品などから、特別史跡は遺跡や名勝地などから選ばれる）

疑問③ 「多胡」とは何か。

奈良時代の中央政府の行政制度「国郡郷里制度」法による新設の「郡」の名前。

「胡」は中国系の渡来人ではない中央アジア系の民族を示すという説もある。この地域は「胡」「高句麗」

「唐」「新羅」や東北地方の蝦夷などそれぞれが高度な文化をもつ他民族が共存し、繁栄した社会であった。

疑問④ 「古碑」は日本のそこら中にあると考えられるが、他の碑と何が違ってすごいのか。

日本国内に現存する日本語の語順で書かれた平安時代以前の古碑は18例しかなく、そのうちの3例が、このように日本列島東部高崎市南部地域の直径およそ3kmの中という狭い地域に集中している。これだけ狭い範囲にまとまっているのは全国でも例をみない。当時の上野地域の重要性を知る貴重な石碑である。

これらは仏教や文字また石碑建立という渡来の諸文化を継続的に受け入れたことを示すものでもある。

疑問⑤ なぜ上野三碑が「世界の記憶」に認定されたのだろうか。

「上野三碑」は、飛鳥、奈良時代の政治体制や家族の在り方、また仏教、文字、石碑建立という渡来の諸文化を継続的に受け入れたことを示すもので日本における記憶媒体である。このことにより、ユネスコの「世界の記憶」遺産に登録された。

6. 感想

「多胡碑」は何を語るのか。漢文の難しいものを訳す感じかな程度に調べるつもりだったが、全然違った。石文の内容はというと意外にも単純で、権力のある人が家族のために建てたことや、新たな建郡を示すものだった。しかし、様々な解説から、刻まれた文字には巨大なバックグラウンドが隠れているのだと気づかされ、驚いた。「昔を語る」とは「石碑」に刻んである数十文字の表面的な内容のことだけではなかった。「石碑文化」自体からわかること、「仏教」や「寺」の文字が意味すること。「漢字」や「語順」からわかること、家系図からわかることなど、びっくりの連続だった。この数十文字からこんなにたくさんのがわかるなんて思ってもみなかった。また、石文は日本語の語順に並んでいた。当時の記録を石に刻んだ結果、記録する機械もない時代、当時の人の話す語順を現代の私たちが知ることができるのだとわかったとき、「石碑」はすごい記録媒体であることを知った。そして、「石碑」だから、歴史にかかわる重要な事実を風化させずに千年以上経っても私たちの目にすることができる貴重な記憶の資料となったこともわかった。そこら中にあると思っていた「石碑」だが、平安時代以前のこうした「石碑」は18基しかないと知り、驚いた。どれも同じ石だと思っていたが、そうではなく、上野三碑ははるか昔を語る石碑だった。

「多胡碑」の羊太夫の伝説については少し聞いたことがあったが、改めて知ると、当時の日本人から見た計り知れない渡来人のすごさを感じる。「甲子夜話」に記述のある、十字架と銅板についても、もしかしたら、キリスト教の伝来がこの時代にもあったのかと、今もどこかで眠るかもしれない遺物がいつかみつかるといいなと思う。「羊」とはなんなのか。何者なのか。動物なのか、キリスト教信者のことか。何故「羊」なのか想像するとわくわくする。「多胡碑」の調査は、「羊」という文字のおかげで私にとって想像以上に面白い研究だった。2026（令和8）年は、「金井沢碑」建立1300年の記念となる年である。「多胡碑記念館」では夏・秋の企画展示「こどものためのコウズケサンピ」を展示していた。豊富なイラストパネルや遺物などとてもわかりやすく、「上野三碑」をほとんど知らない私が理解するのに本当に役立った。また、高崎市文化財情報のサイトには、わかりやすい解説動画が豊富で、「多胡碑記念館」で見たものが家でも何度も見ることができて読む資料だけでは難しい「上野三碑」の理解にはかなり助かった。

「多胡郡」の範囲は、奈良・平安時代には、上野国有数の手工業地域（瓦などの窯業、布生産）に成長している。私の住む富岡市では、明治時代に「富岡製糸場」ができたが、さかのぼれば、「多胡郡」の建郡が大きく影響していることがわかった。

1300年以上昔のこの地域には、女性や他民族など多様性を認める共生社会があったと知り、現代に生きる私たちよりもずっと考え方がすすんでいて、やはり、「すごい群馬」なんだとあらためて思った。



【参考文献】

- ・「多胡記念館」令和7年度夏・秋の企画展示「こどものためのコウズケサンピ」
- ・上野三碑パンフレット ・上野三碑（小学生用） ・金井沢碑の遺産～古代豪族と仏教～
- ・南八幡文化財マップ上野三碑の里をめぐる ・高崎市多胡碑記念館パンフレット ・上野三碑かるた解説
- ・高崎市文化財情報サイト・デジタル版「東国文化副読本～古代ぐんまを探索しよう～」
- ・YouTube「どこからやって来たのか？1300年前の群馬にいた渡来人集団 多胡郡の謎」

◆「石文」とは汎東アジア的な知識を吸収し、仏教信仰への熱意とそれを実践した人たちの名を明記し、その記憶を末永く伝え残すとの意思を明確に表した言葉

石碑建立には 修文 銘文づくりの達人

鑄碑（せんひ）石碑づくりの工匠 がいる

仏教関係者が銘文を刻んだ石を建立する。石碑は仏教の伝道や寺院造営が関わっていた

◆「鑄る」は、石に文字を刻むことを書く